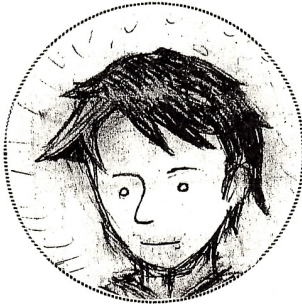


学校だより 希望の鐘

ひとつづつはいつしかひらかない



八 戸 市 立
小中野中学校
平成28年6月14日(火)
No.47 文責：校長
工藤 聡

自信を持って、あきらめないで闘え！！

私の尊敬する先輩の先生が、中体連夏季大会の前に自分が学年主任を務めている3年生に、「奇跡は『勝ちたい』と思っている人、『絶対にあきらめない』と思っている人にしか起こらない」と言ったのを聞いたことがあります。まさしく私もそう思ったので、今でも鮮明（センメイ：あざやかではっきりしていること）に覚えています。そこで、私がかつて顧問を務めていた時に経験したことのある、ほんの些細（ササイ：ほんのわずかなこと）な「奇跡」を皆さんに紹介します。

奇跡の10本 ～卓球部M君の試合から～

私は、今から15年前から9年前までの6年間、市内のH中学校に勤務し、その間男子卓球部の顧問を務めていました。中体連は夏季大会と秋季大会があるので、6年間で12度県大会に出場するチャンスがあるのですが、生徒たちの頑張りでそのうち6度県大会に行くことができました。（優勝は1回もできませんでした…。）その中の、平成16年の夏季大会のことです。

6度の準優勝の中で最も苦しかった大会です。監督の私でさえ「もうだめだ」と思いかけた場面が何度かありましたが、それを乗り越えての準優勝ですから、最も価値のある準優勝だと思っています。その準優勝への道程（ミチノリ：進行の経過）で転機（テンキ：物事や状態のかわるきっかけ）となった一つの試合を紹介します。

その試合は、N中との2次予選（準々決勝にあたる試合）でした。卓球の団体戦は4つのシングルスと1つのダブルスの5ポイントのうち3点を先にとった方が勝ちになります。N中は前年の新人戦の準優勝チームで、私のH中はベスト4にもはいれませんでした。最初はその実力が出たのか、途中まで1対2でリードされていました。4番目の生徒がN中のエース（新人戦では県大会出場）と接戦でしたが、フルセットにもつれこんで、最後は12対10で勝つことができました。これでゲームポイントは2対2です。そして、最後がM君でした。相手はやはり新人戦で県大会出場を果たした強敵です。1セット目と3セット目を取られ、なんとか2セット目を取り返したもののセットカウントは1対2の劣勢（レッセイ：勢いがおとっていること）です。しかも4セット目も、徐々に点差を広げられ、2対10とあと1本取られると試合に負けるということまで追い詰められてしまいました。私が「もうだめかも」と思ったのは、まさしくこの瞬間でした。ところが、ここから奇跡がおこったのです。土壇場（ドタンバ：せっぱつまった場面のこと）から1本ずつとっていき、気がつくといつの間にか10対10のジュースになっていました。あと1本取ればこの試合に勝てるという場面から、8本続けて取られた相手の選手に耐えられる気力は残っていませんでした。2本あっさり取ってM君が勝利したのです。「1本取られたら負け」という状況から10本続けて取るということは、野球でいえば最終回裏の二死走者なしから10点差を逆転すると同じことです。サッカーでいえば、ロスタイムで5点差を逆転することなのです。私が福原愛ちゃんと試合をしても、10対2からであればもしかすると勝てるかもしれないのです。そういう状況ですから、まさしく奇跡なのです。この奇跡を起こす原動力（ゲンドウリョク：物事の活動を起こすもととなる力）となったのが、M君の最後まであきらめない精神力と、必死で応援している人の気持ちだったのだと思います。この力が翌日のS中との試合にも発揮され、予選リーグで0対3で完敗（カンバイ：完全に負けること）したS中にも勝つことができたのでした。

いよいよあと4日で、「熱い闘い」が始まります。これまで、幾多のドラマがあったことと思います。歌手の“さだまさし”に「主人公」という歌がありますが、その人の人生においては、誰もがみんな主人公・主役です。テレビドラマの脇役であれば、苦しい場面で颯爽（サッソウ：きりっとして勇ましい様子）とヒーローが登場して助けてくれますが、自分自身の物語の中では、自分で打開（ダカイ：きりひらくこと）していくしかありません。大会では、本当に苦しいと思える瞬間（とき）がくるはずですよ。その時には、「絶対にあきらめない」とことと、これまで応援してくれたすべての人、そしてみなさんを見守ってくれている家族や顧問の先生の顔を思い出して、自信を持って頑張ってください。きっと将来の糧（カテ：ささえとなるもの）が得られるはずですよ。